氏　　名	：	木下　和彦
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第２９４号
学位授与年月日	：	平成２９年３月２３日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	J-POP の音楽構造を用いた旋律創作方法の開発
論文審査委員	：	（主査）　教授　中地　雅之 （副査）　教授　有元　典文　　教授　山内　雅弘 教授　本多　佐保美　　教授　小川　昌文

学 位 論 文 要 旨

筆者は、子どもが学校外で得るインフォーマルな音楽経験、特に聴取経験が、音楽科の創作活動へ活用可能であると考える。日常生活の中で J-POP を中心としたポピュラー音楽を聴き親しむ日本の子どもは、すでにその聴取経験から得た音楽を創作するための基礎的な知識や能力を潜在的に有しているのではないか。そして音楽教育学は、それを活かすための具体的な実践アイデアについて、十分な知見をもたなかったのではないか。本研究ではこの課題に対し、①J-POP の音楽構造の分析によって、J-POP 風の旋律をつくるための方法を構築・提案すること、②構築・提案した方法を用いて小・中学校にて実践を行い、その方法の有用性を検証すること、③実践を通して、音楽科の創作活動において J-POP を取り上げることの教育的意義を考察すること、以上の 3 点を目的として研究を行った。なお、研究方法は、文献研究、音楽分析、実践研究の 3 つで構成される。また、本研究においては、J-POP を「1990 年代以降に日本で生産された流行音楽」と定義した。

第 1 章では、音楽科において本研究で対象とする創作及び J-POP・歌謡曲を取り上げた実践の展開を、創作に関する展開と流行歌に関する展開の 2 つの視点から概観した。また、1989 年から 2013 年に発刊された雑誌『教育音楽中学･高校版』の記事分析を行った。これらを通して、J-POP を教材とした実践においては、創作に関する実践が稀少であり、分析を通して新たに方法を考案し、創作教材として J-POP を用いることの教育的意義を論じる必要性に言及した。

第 2 章では、創作教材として J-POP を扱う上での諸課題について、教材化に向けた視点を得ることを目的に文献研究を行った。具体的には、J-POP は音楽産業と切り離せない音楽であり、その聴取行動はマスメディアや周辺機器の進化に伴い変容していること、そうしたなかで、子どもが J-POP を享受していることを確認し、それらが創作実践とどのように関わりをもつかを考察した。さらに、J-POP を教材化する上での課題である流行現象への対応として、流行現象がある音楽的特徴によって包含されるグループ単位で生じることに着目することの有用性を論じた。これを踏まえ、J-POP を創作教材と仕立てるにあたっては、J-POP の音楽的特徴を「流動的な要素」と「不変的な要素」の二層によって捉えることを提案した。

第 3 章では、まず音楽教育学における既存の創作の方法論の内容を概観し、旋律創作方法を考案するにあたって求められる要素を抽出した。そこでは、創作の方法論において求められる音楽的な「制約」を確認した。続いて、J-POP の音楽分析に関する先行研究を検討し、本研究における研究方法と対象を設定した。先行研究を批判的に検討した結果、音楽科における既存の旋律創作方法と関連付けることが可能である音楽的特徴をあらかじめ設定し、その特徴を有すると考えられる分析対象楽曲を任意に設定することとした。

これを踏まえ、J-POP の音楽的特徴を析出するための 2 つの分析を行った。1 つは、「同音に連続傾向のある旋律」である。2000 年以降の J-POP から任意に楽曲を抽出し、①２音間の旋律の音高の推移、②同音での連続進行以外の旋律の移動推移、③コードトーンと旋律音の音度関係、④旋律の各音高の拍数の割合、以上 4 つの分析を行った。結果、当旋律を形成する音は、反復する音／経過する音／反復音に回帰する音の 3 つに大別可能であり、それに基づく創作方法を考案した。

もう 1 つは、「J-POP のメロディーにみられる『反復』『変化』『応答』」である。具体的には、授業での使用を前提に任意に抽出した J-POP 楽曲の旋律を、①反復部分の音楽的特徴（反復の回数、音価、音高、リズム）、②反復部分と他の部分の比較、③コードトーンと旋律音の音度関係の観点から分析した。結果、対象とした旋律の反復は、リズムの反復（音高と歌詞は反復しない）、リズムと音高の反復（歌詞は反復しない）、リズムと音高と歌詞の反復、以上 3 つに分類されることが分かった。これらの分析を基に、2 つの旋律創作方法を提案した。なお、いずれの方法も、旋律における非和声音がときにテンション音として解釈される余地を含むことによって、単一の旋律創作方法に多様なコード進行を合わせることが出来る。

第 4 章では、筆者が現場の教員と共同で行った 3 つの実践を対象に、本論で提案した創作方法の有用性とその教育的意義を考察した。2014 年度は、まず、筑波大学附属小学校 5 年生を対象に「同音が連続する旋律構造」を用いた方法による旋律創作の授業を行った。結果、提案した方法は小学校高学年におけるソプラノリコーダーを用いた旋律創作活動に有用であったことが確認された。一方、多くの児童はつくった音楽が「J-POP である」と認識出来なかったこと等の課題が示された。これを踏まえ、お茶の水女子大学附属中学校 2 年生を対象に、同様の構造を用いた旋律創作の授業を行った。結果、提案した方法は中学校におけるアルト・ソプラノリコーダーを用いた旋律創作活動に有用であり、かつ当実践は生徒の J-POP に対する聴取体験を活かした活動であったことが明らかになった。さらに、2016 年度に同中学校において「J-POP にみられる『反復』『変化』『応答』」を活かした方法による旋律創作の授業を行った。結果、提案した方法は生徒によって主体的に用いることが出来る「足場」として機能し、生徒はその「足場」を用いて自身の J-POP の聴取体験と関わらせながら旋律を創作していることが分かった。

これらを踏まえ、第 5 章では結論として以下の 3 点を得た。

①J-POP の音楽構造に基づいた旋律創作方法は、従来の音楽科の旋律創作方法に関連付けて展開することが可能である。②J-POP の音楽構造を用いた旋律創作方法は、小学校・中学校の実践において、子どもが主体的に活用することが出来る「足場」としての機能をもつ点で有用性がある。③J-POP 風の旋律創作は、児童･生徒の日常生活での音楽聴取経験を活かしながら活動を行うことが出来る点において、音楽科の創作教材としての教育的意義を有する。

本論で実践を行った子どもの多くは、授業以前に音楽をつくるための知識を潜在的に有していた。学校音楽教育は、彼らが授業でのフォーマルな音楽学習経験を得る前に、既にインフォーマルに音楽的に豊かな経験を持ち、そこから音楽を創作するための知識と能力を潜在的に有している現実を認識すべきである。そして学校音楽教育は、音楽に関する知識や技能を子どもに提供するだけでなく、また彼らが日常的に得がたい我が国の音楽などの音楽に触れる場としてだけでなく、彼らが教育を受ける前に既に潜在的に有する音楽に関する能力を引き出すという方向性で、その実践の在り方や活動方法を切り開いていくことが可能なのではないだろうか。